

【研究ノート】

高麗時代の金工品に見る造形と信仰

—韓国国立中央博物館所蔵の金銀製小仏龕—

仏教は韓半島に四世紀後半に伝わり、統一新羅～高麗時代にかけて特に盛んに信仰されました。その内容は禅や華嚴宗・天台宗を中心とし、仏教が国家宗教としての扱いを受けたこと、半島内で起った紛争や遼・元からの侵入を受けたことにより、護国の意味合いを強く持っていたといえます。

現在まで残っている高麗時代の文物は少なく、その中で信仰に関わる仏教工芸は比較的残されているといえるものの、発見された場所や状況が不明なものも多くを占めています。

2009年に韓国で高麗時代の仏教工芸品を調査する機会をいただきました。本文ではその中で出土品について伝えている一作品について考察を加えたいと思います。

この作品は韓国国立中央博物館に所蔵されている小仏龕で、銀製の箱形の仏龕内部に金製の仏像が納められています(図1、2)。仏龕のサイズは縦5.8×横4.2×厚0.7cmで、ちょうど掌に納まる大きさです。箱の正面には開口部が設けられて銀製の扉板が附属し、これを上方に押し上げ開いて像を押す形状です。箱の側面と背面の上方には各一ヶ所穴が開けられ、紐や鎖を通したと見られます。内部の尊像は金板を打ち出し、線刻が施されています。向かって左側は右手に戟鉞を持ち左手に宝塔を載せる毘沙門天、向かって右側は蓮台に立つ菩薩があらわれます。菩薩は宝冠を被り、胸部には卍が刻まれ、杖のようなものを持ちます。瓔珞などの装飾を身に着けず衣をゆつたりとまとった簡素な姿です。「釈迦三尊・十六羅漢図」(図3)

中の普賢菩薩に同様の大衣と持物を見ることができ、本品の菩薩が持つ杖のようなものは蓮華と見られます。本品の状態によって、尊像を引き出して宝冠の化仏を確認することはできませんでしたが、毘沙門天との組み合わせを考慮すると、菩薩は毘沙門天とともに高麗時代に信仰の篤い尊像である観音菩薩と考えられます。

本品のような小仏龕は他にも幾つか残っており、材質も金や銀が使用され、打ち出しや線刻によって細部まで作り込まれる点で共通します。本品と造形が近い仏龕の中には、高麗仏画に数多く描かれる水月観音が安坐しています(図4、縦4.0×横2.2×厚0.8cm)扉の受け部の造りや開口部の上辺を稜形とし、箱の表面に点刻による蔓唐草文を配する点、観音の衣に点刻で文様を付ける点や扉表面の雲文など、細部に渡って本品と近似した作風を示し、製作はおおよそ同時期と見られます。これらの仏龕は小さく、紐や鎖を通す環や孔があり念持仏として携帯されたと考えられます。高麗時代には青銅鏡や銅板の表裏面に仏像を線刻してあらわすものがあり、これらにも懸垂用と見られる孔が開けられていることから、用途の一つに携帯用念持仏としての性格が考えられます。線刻を施した鏡と小仏龕にあらわされる主な尊像は共通性があり、現世利益や海運を願う観音菩薩や護国・護法神である毘沙門天、これらを眷属とする阿彌陀如来、宝塔が挙げられます。また高麗時代の鏡の背面文様には点描の蔓唐草文があり、彫金技法(点刻)からの影響が窺えます。仏龕の素材で

ある金銀や鏡は 光を発すると考えられたことでも共通します。両者の関連は深く、これらの特徴は高麗仏教の持つ性格の一面面を示しています。

さて、本品では箱の背面に梵字が刻まれています(図2、筆者描き起こし)。小仏龕におけるこのような他例を知りませんが、金山寺型と称される大型の高足杯に似た形状の香炉など、高麗・朝鮮王朝時代の仏具に梵字をあらわす行為は他にも認められます。

これらの作例及び梵字に関する先行研究(許一範「高麗・朝鮮時代の梵字文化研究」『歴史考古学』第57号2006年、「韓国梵字資料調査」『歴史考古学』第59号2008年など)を参考にすると、本品に刻まれた梵字は、右上「om」、右下「ma」、中央「va」または「ba」、左上「ni」または「di」、左下「dra」であろうと考えられます。尊格の組み合わせから種子には特定できず、「om」を接頭語とした字句と推測されます。梵字の「va」と「ba」は字形が近く、中央の文字はどちらともとれます。「om mani va(ba)dra」、右上→右下→左上→中央→左下と読んでいくと思われます。高麗末期とされる長崎の普光寺蔵金鼓に陽鑄された真言(図5)には本品と同形の、高麗時代に特有の異体字と見られる「om」や字形の近い「ni」が認められ、円形に沿って左回りに綴られています。他の類例を考慮する必要がありますが、「成就妙法蓮華經王瑜珈觀智儀軌」(唐の不空訳)などには「陀羅尼文字を以て、心月輪上に於いて右旋布列する」とあり、右側の文字から左側へ読むことも首肯されます。

サンスクリット語のbhはパーリ語のbhと音転し、パーリ語で「maṇi」は宝珠、「bhaddra」は賢きの意味を持ち、「maṇi bhaddra」は宝賢夜叉、毘沙門天の眷族の一尊を指します。『仏説宝賢陀羅尼經』(大正蔵 no.1285)には、一日

に三度心に誦念することの功德に一切のことに皆吉祥を得、財宝等を供給するなど、極めて現世利益的な内容が記されています。またその陀羅尼には「摩尼跋捺囉」の語が17回も登場し、音は「manivadra」となります。更に検討する必要はありますが、以上から、この梵字は宝賢の尊名と解されます。

『仏説宝賢陀羅尼經』は法賢によって北宋の十世紀末に漢訳されています。その後高麗に伝わり、書写が残されています(『甲子歳(1264年か)』奥書、神戸・太山寺蔵)。本品の存在はその受用を示しています。

本品は掲載図録の解説によると南原郡夫人梁氏墓の石棺から出土しています。墓碑の拓本(天理大学附属図書館蔵)には梁氏が63歳で没し「正豊元年丙子」に埋葬されたことが記され、現在のところ1156年(金の正隆元年)に充てられています。発掘報告書は出されていないようで出土状況は不明ですが、本品の製作年代下限が推定されます。墓碑には梁氏が生前行った作善についても記されています。本品は南原郡夫人梁氏が携帯した遺愛品なのでしょう。

本品には数か所の破損がありますが、梵字はこれと避けて線刻されています。また正面や側面の文様と梵字は線刻の調子が異なり、『仏説宝賢陀羅尼經』が追善の内容ではなく現世利益の功德を説くことから、本品は梁氏が生前に製作・携帯したもので、破損を受けた後に梵字を線刻、没後、埋葬時に遺愛品として石棺内に納められた可能性が考えられます。

本品は高麗時代に中国からの新来の密教経典が個人の日常的な信仰にまで受け入れられ、浸透していた状況を具体的に示す貴重な作品であり、高麗時代における密教の重要性が改めて着目されます。

(作品調査に際して、韓国国立中央博物館及び助成を受けた財団法人美術工藝振興佐藤基金に深く感謝いたします。図1は『Goryeo Dynasty Korea's Age of Enlightenment 918-1392』The Asian Art Museum of San Francisco, 2003年、図3は『高麗時代の仏画』時空社、2000年、図4は『Metal Arts Embodied in Buddhism』Yong-in University Museum、2006年、図5は本文中の許一範氏論文より転載させていただきました。瀧朝子)

図1 正面・扉



図2 背面



図3 根津美術館蔵 14世紀



図4 Leeum 蔵 図5 文字部分

